

建築家の自邸



【登録文化財に隣接するメタリックな住宅】

覧家住宅の敷地の一角には、ご当主で建築家の覧清澄さんが設計した自邸があります。ガルバリウム鋼板の外装や鉄骨で組み立てられたバルコニーなど金属質でエッジの効いた建物は、登録文化財の主屋と不思議なくらい馴染んでいます。

その理由は、敷地の中心にある庭が新旧ふたつの建物を緩衝する役割を果たしているから。絶妙のバランスで配置されているのは、ここで培われた感覚の賜物です。

また、いろいろな素材が散りばめられた外観も見どころです。細い道路と自邸を隔てる千本格子や、風通しの良いバルコニーの手すり、赤い玄関の扉にガラスブロックなどの遊び心のあるデザインが、建物に楽しい表情をつくりています。

そして、この住宅の一番の見どころは、明るく暖かい室内空間です。日当たりのよいリビングは12月でもほとんど暖房を使わないそうで、木に囲まれた柔らかい空間にル・コルビュジエの寝椅子が置かれ、とても居心地良さそうです。

また2階の天井の高い子ども部屋は、壁面上部の高窓から西日を採りいれる工夫がなされ、直射日光を避けつつ明るい空間になっています。

伝統的な木造建築と新しいデザインの建物が巧みに共存されているところも、覧家住宅の大きな魅力です。



活かす

日本の木造建築は、建具を取り外すことで空間を広く扱うことができる。
元は住宅だった建物を飲食店に転用できるのはその為だ。
また、開け放した空間を自由に設えられる点も大きな長所となる。



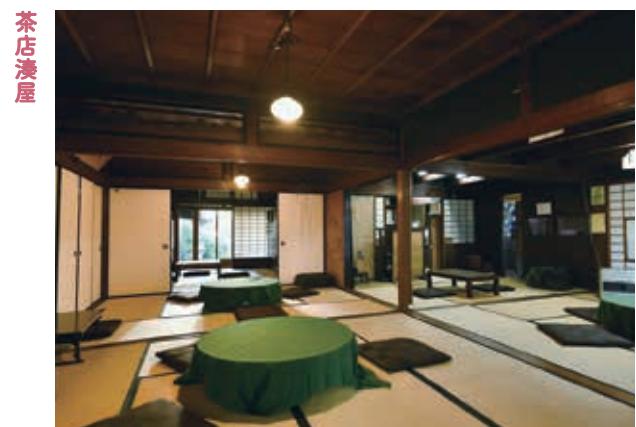
登録／2010年9月
登録基準／国土の歴史的景観に寄与しているもの(店舗兼主屋・土蔵)



photo:Hiroshi Yoshida

旧湊屋

絶品の郷土料理がもてなす、木曽川渡しの旧商家



茶店湊屋

尾張地方の郷土料理を出す、とつておきのお店を紹介しましょう。木曽川に架かる濃尾大橋の傍らの、金比羅神社の目の前にある茶店湊屋です。おすすめは季節ごとに献立を変えた湊屋御飯。丁寧に下揃えされた料理は、美味しいだけでなくどこか懐かしく、食事のありがたさをしみじみ感じさせてくれる逸品です。



Merrimac Roadに面して平入に店を開く外観。交差点にたつため、ひときわ目立つ。木綿の暖簾が風に揺れて美しい

かつてこのあたりは木曽川を渡る美濃路の起宿として栄え、湊屋も渡し船や船運をあきなう商家でした。

美濃路には7つの宿場があり、起宿はちょうど中間あたりで、木曽川の渡河を控えた大きな宿場町でした。湊屋の小川文右衛門は、常夜灯の立つ金比羅神社の隣地に屋敷を構え、江戸後期から幕末にかけては縞木綿の仲買で財を成したといいます。

やがて時代は下り、明治になると一宮は織維産業で隆盛し、起宿にもノコギリ屋根の工場が次々と建てられ、まちは発展しました。小川家はその後東京に移り、日本で初めてデザインタオルを製造した「小川タオル」を興しました。

茶店のしつらえ

現在の湊屋の主屋は交差点にたち、ひときわ大きく見えます。石の基壇の上に出格子



並び立つ倉。奥が江戸後期の西倉



懐かしさを愛おしむ

戦後、空き家だった湊屋は、地元で織維業を営む丹羽家が購入し、長く住まわれています。しかし所有者が転居することになり、取り壊しを惜しんだ人々の協力でNPO団体「湊屋俱楽部」が設立され、管理と運営に当

と板塀のならぶ外観は、ここだけ時代に取り残された感があります。それは、明治24年の濃尾地震でこの辺りの古い町家はほとんど倒壊し、今では湊屋しか残っていないからです。

石段を上り、大きな木綿の暖簾をくぐると、庭側にも戸を開く開放的な土間があります。かつては奥まで続く通り土間で、屋根には煙突やかな光と、季節の飾りやお花、屏風などのしつらえが来客を楽しませます。

主屋の裏手にはギャラリーに改築された西倉と東倉があり、土蔵が並ぶ姿が趣のある町並みをつくりだしています。

たることになりました。

代表を務める大島八重子さんは、湊屋で提供される手間を掛けた料理を通じて、日本の伝統的な暮らしの素晴らしさを伝える活動を続け、今では多くの賛同者を集めています。本当に美味しい郷土料理を味わいたいときには、ぜひ湊屋へ足を運んでください。お腹も心も満足すること請け合いです。

店舗兼主屋／明治前期・1948年(昭和23年)改築
店舗兼主屋／木造平屋建 切妻造棟瓦葺き
【設計】不明
一宮市起字堤町33-1
<http://minojinminatoya.com/shop.html>

滋味あふれる絶品の湊屋御飯



土間を改修したホールと小屋組み

代わり、幕末まで同地の代官を勤めました。ちなみに陣屋とは今の役所にあたり、そこで政務や治安を司った役人を代官といいます。現存する建物は代官屋敷の主屋と蔵ですが、以前はその隣に陣屋があり、堀と石垣で囲われ、表門を開いていました。陣屋と主屋には式台のついた立派な玄関があり、武家屋敷らしい接客を重んじた佇まいだったと伝わっています。

また、富田家が公務で記した膨大な記録は、郷土史本宿研究会の皆さんによつて調査され、その一部は土蔵に展示されています。

明治36年に富田家は陣屋の跡地で病院を開業し、以来120年近く岡崎の地域医療を支えています。

バリアフリーへの思い

お店のホールとテーブル席の取り次ぎには、車椅子の方のための昇降機がつけられています。ご当主で富田病院院長の富田裕さんは、「患者さんやそのご家族にも美味しいものを召し上がっていただきたい」という思いから、バリアフリーにこだわりました。



テーブル席。バリアフリーを考慮し土足で上がる

木南舎／1827年、土蔵／1876年(明治9年)(共に)平成30年改修

木南舎／木造2階建(切妻造瓦葺き越屋根つき)、

土蔵／木造2階建(一部平屋 切妻造瓦葺き)

【設計】不明【改修】富田工務店

+ak design 級建築士事務所

岡崎市本宿町字商中町 23

<https://yugino.com>

木南舎からユギーノーエゴへ

現在、リースランテに改修された主屋は、煙出しの越屋根が上がる姿が特徴的で、建物の南側に立つ楠の大樹から木南舎と名付けられていきました。

お店は、かつての土間に入口が設けられ、外には楠のある庭が見えます。庭の一部は、石垣とともに代官屋敷だったころの姿をとどめる貴重な遺構です。また厨房に隣接したカウンター席は、隠れ家的なオシャレな空間となっています。

富田さんが手掛けたリースランテは、地域の活性化と地域医療が結びついた全国的にも新しい試みです。その中心で、家の歴史を伝える建物が生き生きと活用されている姿に、深い感動を覚えます。

木南舎



主屋の外観。病院の駐車場の一角にたち、和モダンでオシャレなリースランテからは、いい匂いが立ち込める

富田家住宅

明治開業の病院敷地内にある、代官屋敷のリースランテ

本宿の旧代官屋敷

登録文化財を地域活性化の起爆剤にする、とても興味深い試みを行う病院があります。

富田病院は、国道1号沿いの鉄道高架がひときわ目を引く本宿駅近くの地域密着型病院です。インペクトのある構造物を目印に脇道へ曲がると、並走する東海道本宿の町並みに溶け込んだ富田病院があり、その敷地の一角に旧代官屋敷を改装した絶品イタリアンの「ユギーノーエゴ」が店を構えています。

お店のあたりは絶えずいい匂いが立ち込め、土日になると予約でいっぱいになります。

富田病院 小史

富田家は江戸中期から本宿の陣屋預かりとなった武家で、仕えていた旗本の柴田家に



リースランテとあわせて改修された土蔵

登録文化財で昼食を



photo:Akihiko Mizuno

冬の湊屋御飯。あゆの甘露煮、ぎんなんご飯、赤だし、茶わん蒸し、煮豆、酢の物、和え物、煮物などが所狭しと並べられる

湊屋の湊屋御飯

素敵な建物で美味しい食事をいただけるのは、豊かな時間を過ごせる最高の贅沢なかもしれません。ここでは、登録文化財の住宅で味わえる指折りの名品をご紹介します。

まずは茶店湊屋の湊屋御飯から。季節によって献立を変える料理は、主菜から漬物まで手作りで、丁寧に下塩えされため、前日までに予約が必要となります。

骨まで美味しいあゆの甘露煮は、ほんの少しほろ苦いぎんなんご飯との相性も抜群で、笹の葉とあわせた彩りも美しいです。また、おからと柿の和え物や茶わん蒸し、汁物などの副菜も、いずれもとても手が込んでいます。



そして、大鉢に盛られた煮物は、みんなで取り分けられるのも楽しいです。

最後に、甘味として用意されたおはぎは、お持ち帰りできるのも嬉しい心遣いです。

ユギーノユーゴの八丁味噌のラザニア

次は、旧富田家住宅を改装したリストランテ「ユギーノユーゴ」から。

ユギーノユーゴの八丁味噌のラザニア

岡崎出身のシェフ鈴木勇吾さんは、本場イタリアで4年間修業し、東京の名店「ラ・ビスピツチャ」で料理長を務めたほどの腕前で、お店では地元の食材を使った本格イタリアンを提供しています。

充実したメニューの中で特にご紹介したいのが、八丁味噌を使った「ラザニア八丁味噌風味」です。重ねられた生パスタとミートソースの濃厚な味わいに八丁味噌が加わり、爽やかなコクと香ばしい風味が絡み合い、熟成されたチーズとの相性も抜群です。

一口食べればあまりの旨さにため息が漏れるほど。ぜひ味わっていただきたい逸品です。

爲三郎記念館のお抹茶セット

最後は、爲三郎記念館の数寄屋 de Caféで提供される抹茶と和菓子です。美しい庭を眺めながら、古川爲三郎が愛した銘菓「梅屋」の和菓子と抹茶をいたたく優雅なひと時は、都心部の喧騒を忘れさせてくれます。

おすすめは爲三郎にちなんで作られた夢寿夢寿。餡を黒糖羊羹で包んだ可愛らしい姿にコクのある上品な甘さが絶品のお菓子です。



お抹茶と夢寿夢寿。ネームプレートは茶碗の作者名で、爲三郎記念館とゆかりのある作家の手による

photo:Hisao Takeuchi

ユギーノユーゴ名物の「ラザニア八丁味噌風味」。焼けた味噌の香ばしさとチーズのコクが交りあい、絶妙のハーモニーを生み出す逸品

今回ご紹介したいいずれの店も、おもてなしの心が行き届いた名店揃いです。もし近くに立ち寄った際には、ぜひ訪ねてみてください。美味しい食事と素敵な建物が出迎えてくれるはずです。



ナカノマに架かるはしご

川田家はこの地で畑作を営んだ農家で、二代目の川田源助が種屋川田商店を開き、品種改良した大根の種の販売を始めました。そして三代目伊兵衛が資金や保険などの金融業で家業を発展させ、財を成したといいます。現存する住宅は、その三代目が近郊の町家を購入して移築した建物になります。

空間構成を少し詳しく見てみましょう。平面は通り土間に部屋が隣接する縦並びの六間でした。

町家から農家へ

町家があったのは上街道の通る犬山市の羽黒地区で、元は造り酒屋を営んでいた商家の建物だったと推定されています。その町家を移築した時に、格子の付いた正面を裏に回し、裏側を畑のある表へ向けて農家として再利用しました。

黒地区は通り土間に部屋が隣接する縦並びの六間でした。

空間構成を少し詳しく見てみましょう。平面は通り土間に部屋が隣接する縦並びの六間でした。

町家があつたのは上街道の通る犬山市の羽黒地区で、元は造り酒屋を営んでいた商家の建物だったと推定されています。その町家を移築した時に、格子の付いた正面を裏に回し、裏側を畑のある表へ向けて農家として再利用しました。

空間構成を少し詳しく見てみましょう。平面は通り土間に部屋が隣接する縦並びの六間でした。

予期せぬ美

そんな変遷は、建物に思わぬ魅力を生み出しています。東の妻側に見えるベンガラ塗りの壁面は、もとは来客用の便所と繋がっていましたが、今は透けた瀧縁とともに、外観に面白い彩りを与えています。

またナカノマにある2階へ上るはしごは、南側の庭から入る日射しに照らされて、とても魅力的な階段になっています。

とつておきは、そのはしごの先にある小屋裏です。かつて養蚕に使用された小屋裏に換気用の窓から光が差し込み、棚や天井の撤去されたフランクな床面で反射され、眼前で組み上がる和小屋を浮かび上がらせます。迫力ある造形は、意図された意匠ではないため、神秘的な雰囲気すら漂わせています。

古い建物の調査を通じて新しい発見をし

思ひも寄らない魅力を持つ建物に出会えることは、建築を研究する醍醐味だと思います。

登録文化財になつて

川田家住宅の反転された構成は、登録文化財の申請時に発見されたといいます。そして、そんな調査を通じて建物の魅力に改めて気づいたのが、他ならぬ所有者の方々でした。現在は、建物の魅力をより多くの人々に伝えるため、高齢者向けサロン「わくわくサロン」などを開催し、地域に開かれた施設として活用されています。

養蚕のまち

建物はしばしば、予想できない魅力を生み出します。川田家住宅は、そんな

魅力に出会えるユニークな建物です。

川田家住宅のある扶桑町は、かつては養蚕のための桑畠が一帯に広がり、現在でも大通りから脇道へ入ると、畑の広がるのどかな風景が続いている。



小屋裏に広がる劇的な空間。換気用の窓から光が差し込み、和小屋を神秘的に浮かび上がらせる

川田家住宅

劇的な小屋裏のある、町家を転用した農家



格子のはめられた町家側の外観



ベンガラ色の壁が映える東側の外観

1891年(明治24年) - 1917年(大正6年)移築
木造2階建て 入母屋造 棟瓦葺き

[棟梁]川治兵衛(移築)

丹羽郡扶桑町大字南山名字前ノ前49

旧石原家住宅
（きゅういしはらけしゆたく）
主屋／1860年-1978年（昭和53年）改修
主屋 木造平屋建 切妻造 瓦葺き
【棟梁】藤原大野源兵衛泰明
岡崎市六供町字杉本70
ファサードは
繊細な出格子
で構成される

雅なしつらえ
旧石原家住宅
（きゅういしはらけしゆたく）
主屋／1860年-1978年（昭和53年）改修
主屋 木造平屋建 切妻造 瓦葺き
【棟梁】藤原大野源兵衛泰明
岡崎市六供町字杉本70
ファサードは
繊細な出格子
で構成される

現存する町家や土蔵が建てられたのもその頃で、随所に見られる洗練された意匠や家財道具からは、当時の隆盛ぶりが伺えます。

家業はその後、戦前まで受け継がれ、空襲の被害も受けませんでしたが、戦後になると営業を終了しました。建物はそれ以降、ピアノ教室や料亭、喫茶店などに使用され、現在に至ります。



丁寧に掃除された土間とクド

アートに入れられた思い

旧石原家住宅でアートイベントが始まったのは2015年のこと。住宅を受け継いだ



主屋の裏手に広がる苔庭

石原家住宅の歴史

石原家は、岡崎城下の総持尼寺の寺領で米穀業や金融業を商い、同地の庄屋を勤めた商家でした。また、総持尼寺との機縁から公家との交流も深く、幕末には勤王家を自宅に迎えたと伝わります。

現存する町家や土蔵が建てられたのもその頃で、随所に見られる洗練された意匠や家財道具からは、当時の隆盛ぶりが伺えます。

家業はその後、戦前まで受け継がれ、空襲の被害も受けませんでしたが、戦後になると営業を終了しました。建物はそれ以降、ピアノ教室や料亭、喫茶店などに使用され、現在に至ります。

丁寧に掃除された土間とクド

インスタレーションは六間取りの居室に分けて展示され、隣り合う空間同士が緩やかに連結し、流動的な和風建築の特徴が生かされています。開け放された空間は、表の出格子から裏の庭まで風が流れ、爽やかな雰囲気が屋内に漂っています。

周辺の住宅街から浮いて見えますが、今まではまちの古さを物語る貴重な存在となっています。

イベント時には裏手の門から敷地に入り、まず小さな石橋を渡ります。それを渡ると堀に囲われた苔庭があり、水の撒かれた庭は木立のすき間から刺しこむ光を受けて、幻想的な風景を見せてくれます。

主屋の裏手には、きれいに掃除された土間が戸を開けていて、午後になると室内深くまで光が射し、とりわけクドを明るく照らします。土間に足を踏み入れると、小屋組みが中空を渡り、太い梁を支える束が細い鴨居の上に載つて、緊張感のある面白い景色をつくっています。

大辻織絵さんは、歴史ある家のさまざまな思いを込めて作品を制作・展示し、参加者をもてなしてきました。

雅な町家の意匠とインスタレーション・アートが混じり合い、掃き清められた空間を彩る一日は、毎回多くの参加者を楽しませています。



出格子で構成される主屋の外観。住宅街の道路に間口18mの町家が突如現れる不思議な風景

photo: Hisao Takeuchi

旧石原家住宅（石原邸）

住宅街に潜む、町家アート・ミュージアム

期間限定の古民家アートイベント

秋の週末に行われる「あいちのたてもの博覧会」にあわせて、年に一度のアートイベントが岡崎市の旧石原家住宅で開催されます。この日に向けて手入れされた邸内では、家にまつわる古道具類を積み重ねたオブジェや、庭で採取した植物を用いた床飾り、タペストリーに書かれた書などがしつらえられ、雅な和風空間がユニークなインスタレーション・アートの展示空間へと生まれ変わります。



石原家に残る古道具を重ねたオブジェとタペストリー



居間と和室、台所が繋がった美しい空間

宅地開発と丹羽英二

川原田家住宅のある名古屋市昭和区の南山町は、大正から昭和にかけて耕地開発された場所で、目の前には登録文化財の南山学園ライネルス館がたっています。丘陵を下った角地にある川原田家住宅は、コンクリート造の立派な石垣と塀で囲われ、開発以降に育った木々が生い茂っています。

中廊下住宅と設備の美

数寄屋風の玄関に入ると、きれいなタイルがお出迎えくれます。取り次ぎの凝った障子紙を横目に廊下を向くと、正面に木枠の大きな窓があり、中廊下の暗さが巧みに解消されています。川原田家住宅の魅力のひとつに多様な窓の造形があり、玄関に隣接する洋間の窓や、居間の窓、階段上部の窓など、空間の性質と方位に合わせてたくさんの窓が開けられ、換気と採光に配慮されています。

次世代へ託す文化財

川原田家住宅は、施主だった川原田信男さんの思いを汲み、現在まで大切に維持管理されてきました。そして、今後も建物がきちんと保存していくことを願つて、次の所有者に委ねることを検討しています。

受け継いだ文化財の行く末を考え、どのように継承させていくのか。難しい問題に真摯に向き合う所有者たちの姿には、頭が下がります。



中廊下の突き当たりにある窓

主屋／1937年(昭和12年)
主屋／木造2階建／入母屋造棟瓦葺き／一部銅板葺き
設計／丹羽英二建築事務所
名古屋市昭和区南山町25-4他



台所を見る。正面の大きな出窓からは、高低差のある隣地の緑が見え、柔らかい光が空間全体に拡散される

川原田家住宅

大正期の新興住宅地に残る、機能美に満ちた中廊下住宅

台所の美

住宅設計で施主のこだわりが強く反映されるのは台所だといいます。使い勝手がひとりひとり異なるからです。暮らしについて紹介する雑誌で台所特集が多いのも頷けます。そんな台所ですが、現在のように整備されたのは最近のことです。それ以前は狭くて暗く、不衛生で、大正期の住宅改良運動ではまさに手を加えられた場所でもありました。昭和初期に建てられた川原田家住宅は、



庭側からみた外観。数寄屋風の佇まい



北土蔵。高い石垣に載る黒い蔵が豪壮

三井家は江戸中期ごろから約100年に渡つて知多半島東部の庄屋を務めました。代々「傳左衛門」を名乗り、庄屋に就いた三代目に苗字が許され、四代目のときには尾張徳川家から「三井」の永代苗字と三振の刀を賜つたと伝えられています。

四代目三井傳左衛門は、飢饉の折に900両もの借金の保証人になつて村人を救い、また近郊の村同士の争いでは調停に尽力したといい、現在でもその功績をたたえる足跡が残されています。

登録文化財から町指定文化財へ

建築的に興味深いのは主屋で、一般的な民家

に比べて複雑な平面構成になっています。これ

は「四つ建て」という、屋根を支える4本の主柱とそれを繋ぐ梁で構成された中心部から、庇を増築したためと考えられています。

三井家住宅



三井家の古文書。約4万6千点が残されている



は丘の上にた
ち、建具を開
け放つと気持
ちの良い風が通り抜けます。かつてはここから衣浦湾も見渡せたといい、付近には武雄神社や旧長尾小学校などがあつた村の中核をなす場所でした。

また現在は銅板が葺かれていますが、その下には茅葺屋根があり、置千木や鞭懸が突き出る姿は、高い石垣に乗る北土蔵とあわせて、まちのランドマーク的な存在となっています。

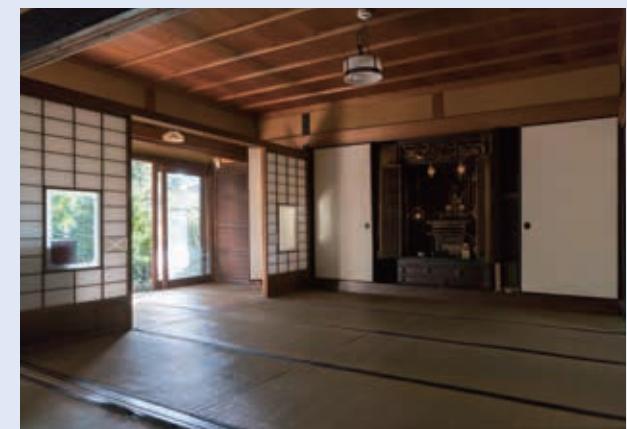
三井家住宅には全国最大級の貴重な古文書が残され、それらも文化財として武豊町歴史民俗資料館で大切に保管されています。長い



主屋の外観。赤い銅板葺の下に茅葺屋根がある。置千木などの屋根飾りは、壬生神社で三井家の靈神が祀られた名残

三井家住宅

武豊町の庄屋
登録文化財の中には、重要文化財や指定文化財になることで、より手厚い保護を受けれる建物も少なくありません。武豊町にある三井家住宅は、ご当主をはじめ地元の有志、そして行政が協力し合い、令和3年に町指定文化財になった建物です。



仏間を見る。縁側の先に弘法大師の石仏が祀られている

屋組みや、太い柱と梁の明快な軸組、また大きな才工を中心とした間取りなど古い形式を色濃く残した、全国でも稀な建物です。

飛驒から名古屋へ

又兵衛のあつた旧末真村は、飛驒古川駅の北西に位置し、宮川から上つたあたりの小さな村で、江戸中期頃には20棟ほどの茅葺屋根の住宅があつたといいます。

名古屋に移築されたのは昭和11年のことで、後に名古屋テレビ塔を創設し初代社長を務めた神野金之助の強い希望で実現しました。又兵衛の名前は、元の所有者の坂上又兵衛にちなんで付けられました。

移築には名工大の城戸久教授が携わり、神野邸では茶室として使用されました。また、昭和32年に熱田神宮へ寄贈された時にも、城戸教授が指導にあつた



外観。熱田の社に囲まれ、異世界感が漂う

原初の住まい

現在の又兵衛は、赤い鉄板屋根や庇つきの通路が付随し、内部には大きな照明が吊り下り、床にはゴザが敷かれて、当初の姿を想像するには難しくなっています。

ですが、館内の照明をすべて落とし、雨戸を



土間とオエを仕切る板壁。軸部が太い

現在の又兵衛は、お茶会や結婚式の披露宴会場などに使用されています。

古民家のみかた

又兵衛が建てられたのは、江戸初期から中頃と推定されています。少し前の古民家の年代測定では、軒先や床面の低さや、柱・梁などの太さ、表面に残る手斧の跡などから分析されることが多く、又兵衛はそれを満たしていました。一方で、雨戸に残る墨書きには文化六年とあり、また天井があることなど、比較的新しい要素も見受けられます。

実は又兵衛は、末真村へも移築されてきたという伝承があります。平成13年の解体修理の折には詳細な調査も行われましたが、年代の特定には至っていません。

閉め切ると、驚くほど深い闇に包まれた空間に変貌します。広々とした才工に腰を下ろすと、がつしりとした柱や梁に囲われ、大屋根が覆いかぶさってくるような錯覚に襲われます。

大戸や煙抜きから射す光を頼りに見回しても、視線は闇へと引き込まれていきます。オエはかつて土座だったといい、縄で固定された合掌造りの姿と合わせて、原初の日本人の住まいを思い起こさせます。静寂に包まれた深い闇の空間に身を浸すと、遠い昔の感覚が呼び覚まされるようで、言い知れぬ感動に身震いします。

間に包まれた空間。オエから大戸方向を見る。現在、大戸にはガラスが嵌められている。上部は煙抜きの窓

又兵衛

原初の日本人の住まいを体現する、合掌造りの古民家



photo:Akihiko Mizuno



合掌造り頂部の原始的なディテール

不明(江戸中期と推定)
1936年(昭和11年)及び1957年(昭和32年)移築
木造平屋建て入母屋造茅葺き(鉄板仮葺き)
移築調査城戸久
名古屋市熱田区神宮1-1-1
<https://www.atsutelingu.or.jp>